



開物成務

令和6年3月19日(火)発行

校長 津田 千由美

感謝をこめて

今日で、卒業式の練習が終わりました。あとは当日を迎えるのみです。

アフターコロナの卒業式には、在校生代表として5年生が参加します。また、自分たちで創る式学習へと少しずつシフトチェンジもされています。

3学期が始まり、6年生は、卒業までの3か月間をどんなふうに過ごしたいか、また、どんな卒業式にしたいかを、総合的な学習の時間などを使って話し合いました。

「6年間お世話になった校舎をきれいにしたい」

「5年生に掃除の班長や異学年交流のやり方を引き継ぎたい」

「感動する卒業式にしたい」

などの方向性をみんなで共有し、一つ一つ具体的に実現していきました。

校舎をきれいにする活動では、体育倉庫の掃除や二宮金次郎の銅像磨き、水道場の掃除、タイヤ跳びや傘立てのペンキ塗り等々が繰り広げられ、おかげで学校中のいろいろなところが整備され、美しく生まれ変わりました。

本格的に始まった式学習では、実行委員が中となり、日々個人の目標をもち、学習後にはふりかえりをするという一連の流れが定着しました。こうして、自分たちの卒業式を一步ずつよりよいものに高めています。

式学習をファシリテートする先生方にも工夫があります。話を聴かせるための指導です。式学習の中に、参加した先生方の想いのこもった「聴きたくなる」話を効果的に取り入れ、子どもの「聴く力」を育ててきました。

ある日の話は、今年度の学年主任の松川先生の話でした。

「ある日突然」の話をします。昔受けもっていた子どもに、逆上がりのできない子がいました。その子は、「毎日練習して必ずできるようにする」という目標を立てました。来る日も来る日も練

習、運動会が終わった後にも練習していました。先生が「手伝おうか」と言いましたが、その子は「自分の力でできるようにになりたい」と言って断りました。

…(中略)…「ある日突然」は、偶然にやってくるわけではありません。日々の積み重ねがあってこそです。皆さんにもたくさんの「ある日突然」が訪れますように」

また、別のある日の話は、昨年度の学年主任、尾形先生の話でした。

私が小学生だったころ、9時に寝てもいい日が一週間にたった1日だけありました。その日は土曜日でした。なぜなら、土曜日の夜8時から、テレビで「8時だよ！全員集合」がやっていたからです。家族みんなで見ていました。

「8時だよ！全員集合」にはいかりや長介さんという人が出ていました。その方はもう亡くなってしまいましたが、生前こんなことを言っていました。

強くなることはないです。～中略～
いいんですよ、弱いままで。

自分の弱さと向き合い、それを大事になさい。

人間は弱いままでいいんですよ、いつまでも…。

弱い者が手を取り合い、生きていく社会こそが素晴らしい。

静寂な空気の中で、子どもたちは先生方の話にじっくりと耳を傾けることができました。こうした式学習の様子を、5年生だけでなく、当日参加しない1～4年生の子どもたちも参観し、式学習の意味や大切さを全校で共有しています。



<廊下の飾りとあじさい>

感動！「6年生おめでとう集会」

「6年生、ご卒業おめでとうございます」

3月18日（月）に実施された6年生おめでとう集会は、大きな感動の中、終わりました。

3学期に入ってから、5年生全員がいくつかのプロジェクトに分かれ、この日のために役割分担して準備を進めてきました。体育館の壁画制作、6年生の廊下の飾り付け、メッセージカードづくりなど、一人ひとりが自分の役割を明確にもち、責任をもって仕事を進めました。このプロジェクトには、もちろん1～4年生も参加しています。各クラスへ説明に行ったり、1年生にはペア活動を取り入れて丁寧に教えたりしたのも、もちろん5年生です。人のためになる活動を続けてきた5年生は、また一段と高学年らしく成長しました。

また、集会の中では、在校生から6年生へ、歌と呼びかけの贈り物もありました。一生懸命に大きな声を出す1～5年生の姿に、「おめでとう」「ありがとう」の気持ちが表れ、思わず目頭が熱くなりました。

6年生からも在校生へ、卒業式で歌う「旅立ちの日に」の歌の披露があり、美しい歌声を響かせていました。

互いを思いやるあたたかい気持ちが溢れたこの時間を、全校で共有できたことに、1年間の子どもたちの成長を感じます。



<体育館の壁画>

◆来年度の教室配置について◆

先週行われた学年・学級懇談会でもお伝えしたとおり、4月から教室配置を変更することになりました。コロナ禍が拍車をかけ、対人関係を結ぶ力が弱まっていることを実感しています。

そこで、来年度からは同じフロアーに異学年の教室を配置することにしました。日常的な学校生活の中に異学年（きょうだい学年）の交流を生むしくみを創りだそうという試みです。学級だけでない新たな居場所づくり、また、異学年交流による自然と支え合う関係づくりに期待しています。対人関係を結ぶ力を育み、自己有用感を高め、さらに楽しい学校づくりの一助にしたいと考えます。

私の一日は、通学路ウォーキングから始まります。春は早咲きの桜を愛で、夏は日陰の川べりで汗をぬぐい、秋には黄金色に輝く稲穂に感激し、冬の晴れた日には遠くの山々を仰ぎ、四季折々の変化を全身で感じる事ができました。

初めの頃は、挨拶する私の顔を「この人誰だっけ？」と怪訝そうに見つめていた子どもたちも、今では遥か遠くの方から「校長先生、おはようございます！」と声をかけてくれるようになりました。挨拶がさらによくなったことは学校評価の数値にも表れており、子どもたちの成長の一つです。

次の春が巡ってきました。4月からは一つずつ学年があがります。

「もう〇年生になるんだから、自分のことは自分でしてちょうだい」

どの家からも、こんな声が聞こえてきそうです。子どもたちの自立を目指す親としては、進級のチャンスを大いに生かしたいところでしょう。

ある心療内科のドクターからこんなお話を伺いました。

「子どもの心は振り子のようです。安心の振り幅の分だけ、親から離れて外に出ることができるようになります」

子どもによっても、発達段階によっても、その時の環境によっても、振り幅は大きく異なります。振り子の動き（子どもの心の状態）に関係なく、外部から余計な力をかけてしまったら、どうなるでしょう。せっかく動くようにしていた振り子は動きが止まってしまいかもしれません。逆に最も適するところで力を加えてあげれば、より大きく振り子は動き出します。

どこで子どもの背中を押してあげるかは、大人にとってとても難しい問題です。最も適するところを見極めるには、子どもの声にしっかりと耳を傾けること、学校と家庭がよく対話し足並みを揃えることが必要だと思います。そして、困ったときにいつでも戻れる安心の場所も必要です。厳しさだけでは独り立ちできません。

一学期のころ、泣きながら登校してくる子どもが何人もいました。今、泣きながら登校してくる子どもはいなくなりました。どの子どもも学校の中に自分の居場所を見つかることができたのでしょ。中には学校へ渋々出かける子もいるかもしれません。しかし、一旦学校に来ればどの子も笑顔いっぱい、元気いっぱい生活できるようなりました。安心できる場所があると人は頑張ることができるといふことの証です。

この一年間、我が子だけでなく我が子を取り巻く多くの子どもたちの応援団となってくださった保護者の皆様、心から感謝しています。



わたしのひとりごと